

高校かで、「万葉散步」の犬飼孝先生の生徒だったとか。犬飼さんの米寿のお祝いの会に一般参加者として来ていて、先生のリクエストに応じて歌をうたった。たしか「南国土佐……」だったと思う。

父よりも二年先輩なる汽車の木の椅子堅し愚直なま
でに 倉石理恵

木の椅子の汽車だという。いかにも古風な、堅い感じが、亡き父上のイメージと重なるのだらう。分かるような気がする。私が最近であった例では、四国松山の坊っちゃん電車の座席が木製だったような気がする。

カルテには1、2と記され名はあれどまだ人格をも
たざる双子 鈴木香代子

生まれたばかりの双子。医師のカルテには名前ではなく数字が書かれていたという。どことなくユーモラスな感じがするのは、第三句以下、作者が大まじめで表現した言い回しがユーモラスだからだろう。明るい一首。

信綱はこの座敷より目を上げて甲斐の山々愛でたま
ひしか 原口嘉代子

今月の一首目に、「信綱の明治三十六年宿りたる小尾保彰家を訪ね行きけり」とある。信綱三十歳。甲府の昇仙峽を訪ね、『思草』の巻頭歌をえた折のことだ。「この座敷より」と「この」を強調して、現場感を強く出している点が特色。

ソプラノを助けるために声を出すアルトの控え目嫌
いではない 鶴沢梢

クラシックの合唱のレツスンをされているらしい作者。主役であるソプラノを盛りたてるアルトの役割をあえてクローズアップしている。くだけた口語を採用して、会話のような軽さを現出した。

はじまりの象でもあり無でもあるダチヨウの卵は
1・5キロ 太田裕万

言われてみれば、卵は可能性なのだから、はじまりの象でもあり、無でもあるわけだ。なるほどと思った。読者がユーモアを感得するのは、下句に出てくる「ダチヨウ」も「1・5キロ」も、予想外の唐突さだからだろう。

車椅子に包み帽子を被せたりいざ念願の花見に行か
ん 古川典子

一連の他の作を読むと、車椅子の人は小紋潤のようである。歩行の不自由な小紋君を作者・古川さんは親身になって世話してくださっているらしい。

まだ冷たい空気につかかってのこと、車椅子の人に
対する心づかいを、「包み」「被せる」とあたかも荷物
を扱うような動詞をあえて採用して、ユーモラスな、特
色のある表現にしあげている。

コンクリの断裂より生ふ姫女苑一年草は去年を知ら
ず 鷺沼あかね

熊本地震から一年ほど経って、震源地の益城町をたずねた折の作。被災地にとつては地震前と地震後は決定的な断絶がある。一年草を出すことで、シンボリックにそのことをイメージ化してみせた手柄。